

13. 欠ノ上田んぼ

小田原市久野の田んぼは、江戸時代初期に開田された棚田が多い。標高は100m前後、早く日の落ちる地形である。日本全国で江戸時代に入り開田が盛んに行なわれる。小田原久野でも少しでも田んぼを増やそうと、水路や溜池が作られてゆく。久野川の河岸には可能な限り、棚田が作られたようだ。欠ノ上公民館下の6反、15枚に分かれた棚田が、使わせていただいている「欠ノ上田んぼ」である。



50年ほど前に、田んぼはみかん畑に変えられたが、そのまま耕作放棄地になっていた。

10年前、国が元気回復事業の一環で田んぼを再生してくれることになった。復田したあと、農の会で耕作するということが条件であった。一部は神奈川県の里地里山事業に指定されている。

2020年現在、「欠ノ上田んぼ」で15枚を管理している。そのほか畑を1反ほど耕作している。当初のメンバーの多くは原発事故を契機に離れることになった。そこで、「舟原田んぼ」をやっていた笹村が、新メンバーを加え再出発して現在に至っている。2018年は16家族が参加している。田植えは2日間で延べ60人が参加した。



土壌は粘土質で、棚田としては水持ちがよいほうだろう。水は直接川から引くことができ、自由に管理をすることができる。久野川は通年水がなくなるようなことはない。箱根山麓から来る水は、水温は低いが山の恩恵を直接運んでくれている。緑肥を作り、腐植を増やすことを栽培の基本としている。その結果、5年間平均して反あたり600kgの畝取りせとどを達成している。13枚に分かれた田んぼを、担当制で管理している。深水、2度代掻き、ソバカス抑草、徹底したコロガシ。草を抑えていることが高収量につながっていると思われる。

(笹村 出)